

病理診断科

I 研修目標

(1) 一般目標

総合病院の病理診断部門で行われている業務の実際を経験する。

(2) 行動目標

- ① 病理解剖（剖検）の目的と方法を理解し、診断をまとめる。
- ② 組織・細胞診断では臨床各科から提出された検体の肉眼診断、組織・細胞診断、術中迅速診断をおこなう。また各科とのカンファレンスを通して、臨床側から病理に求められている事柄をよく理解し、日常の病理診断の中で常にそれに応えていくことを学ぶ。

II 研修方略

(1) 研修期間

1 か月間（組織診断と剖検）または2 か月間（細胞診断を含む）

*剖検数の減少により1 か月間では症例を経験できないことがあるため、なるべく2 か月間が望ましい。

*ただし、1 か月研修の場合、研修日数は18日（土日祝日を除く）以上とする。

(2) 方法（場所、研修様式、担当）

① 病理解剖（地下解剖室、討論と実地、解剖担当医・主治医）

- ・準備から後始末に至るまでの、病理解剖の基本的な流れを習得する。
- ・解剖の前に主治医と討論することにより、臨床経過・問題点をよく理解し、固定方法・培養・切り出し方など、それに応じた方法を適宜選択することができる。
- ・各臓器の肉眼的な正常像と異常像を理解する。
- ・肉眼病理解剖診断の記載方法を学ぶ。
- ・ホルマリン固定完了後に各臓器の切り出しを行い、肉眼所見と組織所見を総合した上で「病理学的診断」としてまとめ、障害臓器だけでなく全身的な病態生理および死因を考察する。
- ・Brain cutting 見学（開頭症例のみ。東京都健康長寿医療センター研究所・村山部長による）

② 組織診断（病理鏡検室・切り出し室、討論と実地、病理担当医）

- ・検体の受付から診断報告までの流れを理解する。
- ・摘出された各臓器の切り出し方法と、肉眼所見の記載の仕方を学ぶ。
- ・代表的な染色方法とその目的を理解する。

Hematoxylin-Eosin、PAS、d-PAS、Alcian-Blue、Grocott、PTAH、EVG、

Azan-Mallory、Masson-Trichrome、Grimelius、Congo-Red、Ziehl-Neelsen
抗酸菌蛍光など

- ・免疫組織化学的染色（酵素抗体法）の目的と実際。
- ・術中迅速診断の目的と実際。
- ・各臓器の代表的な疾患の組織像を理解する。
- ・組織像から考えられる疾患をいくつかあげ、それらを鑑別するために特殊染色を含めてどのような手法をとるべきかを考え、その結果を評価する。
- ・検体採取の方法、疾患の予後、follow の仕方などについて主治医に適切な助言を与えることができる。
- ・病理組織報告書の作成。悪性腫瘍の場合には各臓器の「癌取扱い規約」を参照・準拠する。

③ 細胞診断（病理鏡検室、討論・見学、病理担当医・臨床検査技師）

- ・検体の受付から診断報告までの流れを理解する。
- ・代表的な染色方法。
Papanicolaou、Giemsa、PAS、Grocott
- ・穿刺細胞診検体採取の見学（乳腺：乳腺外科外来、甲状腺：内分泌内科外来、頭頸部腫瘍：耳鼻科外来）
- ・組織診断との相関を学ぶ。

(3) スケジュール

① 剖検

随時。Brain cutting は解剖後約 10 日以降の金曜日夜。

② 組織診断

午前：鏡検と討論

午後：報告書の作成。切除標本の肉眼診断と切り出し。

迅速診断：随時

③ 細胞診断

午後：鏡検と討論

検体採取見学：随時

④ カンファランス（場所、時間）

- ・呼吸器カンファ（病理鏡検室、毎週水曜日午後 5 時半）
- ・腎生検カンファ（病理鏡検室、第 3 金曜日午後 5 時半）
- ・脳腫瘍カンファ（病理鏡検室、隔月第 2 火曜日午後 5 時）
- ・C. P. C.（剖検例、2 年目研修医担当、管理棟 3 階 AV 講義室、年 6 回、最終火曜日午後 6 時）

Ⅲ 研修責任者

病理診断科 部長 角田 幸雄

Ⅳ 研修指導医

角田幸雄（1984 年卒、日本病理学会病理専門医・専門医研修指導医、日本臨床細胞学会専門医）

長谷川直樹（1990 年卒、日本口腔病理学会専門医）

Ⅴ 評価

別表でおこなう